

29日 金曜

Ⅱコリント

12:1 無益なことですが、誇るのもやむをえないことです。私は主の幻と啓示のことを話しましょう。

12:2 私はキリストにあるひとりの人を知っています。この人は十四年前に・・肉体のままであったか、私は知りません。肉体を離れてであったか、それも知りません。神はご存じです。・・第三の天にまで引き上げられました。

12:3 私はこの人が、・・それが肉体のままであったか、肉体を離れてであったかは知りません。神はご存じです。・・

12:4 パラダイスに引き上げられて、人間には語ることを許されていない、口に出すことのできないことばを聞いたことを知っています。

12:5 このような人について私は誇るのです。しかし、私自身については、自分の弱さ以外には誇りません。

12:6 たとい私が誇りたいと思ったとしても、愚か者にはなりません。真実のことを話すのだからです。しかし、誇ることは控えましょう。私について見ること、私から聞くこと以上に、人が私を過大に評価するといけないからです。

12:7 また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。

12:8 このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。

12:9 しかし、主は、「わたしの恵みは、あな



聖書の記述

たに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

12:10 ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

パウロが自分を誇るようなことを述べなければならなかったのは、自分を尊重しない人々に対して弁明するためでした。もともとパウロは自分の評判などを気にかける人ではありませんでしたが、教会では彼を指導者として尊重しないことで、彼を通して語られる神の真理までもが尊重されなくなっていたからです。

しかもパウロが尊重されないのは、彼に問題があったのではなく、教会内の自己流な信仰を押し通そうとする者が彼を批判していたのでした。

教会では神の御心を語る人は、牧師であってもリーダーや役員、また伝道する人であっても、尊重されなければなりません。それはその人を通して分かち合われる御心（みことばや真理）が尊重されるためです。つまりクリスチヤンはみな証しの立つ生活・人格であることが大切なのです。

しかし誤解や無理解がある場合は、パウロのように大胆に、自分のためにではなく主のために、自らを証明する必要があります。パウロはそのときも「弱さを誇りましょう」と、決して自分が誇りにならないように、謙遜さを失わないように配慮しながら、自分の靈的な恵みを証しています。

主のためには大胆に、しかし自分はあくまでも謙遜に生きましょう。

そして、「弱さのうちに完全に現われる」神の力を実際に体験しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

